慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	「生命界」概念を中心とするフッサール後期思想の展開(続き)
Sub Title	Uber die Entwicklung der spateren Gedanken von E. Husserl den Begriff "Lebenswelt" als das zentrale Thema betrachtend (Folge)
Author	山本, 万二郎(Yamamoto, Manjiro)
Publisher	三田哲學會
Publication year	1960
Jtitle	哲學 No.38 (1960. 11) ,p.111- 129
JaLC DOI	
Abstract	Hauptteil 1) Die veroffentlichten Schriften und die unveroffentlichten Manuskripten von Husserl betrachtend, muss ich sagen, dass er erst den Begriff "Lebenswelt" gebraucht hat, in seiner Abhandlung "Kant und die Idee der Transzendentalphilosophie", 1924. Ich finde den Begriff auch in den Mss., welche 1920-1926 datiert sind. Aber ich kann nicht die exakte Datierung daruber finden. Wir konnen die anderen, dem Begriff "Labenswelt" vorlaufenden Begriffe in den Schriften 1923-1924 finden. 2) Das Interesse von Husserl um die Jahre 1923-1924 konnen wir finden in der "Erste Philosophie". Er versuchte dort das apodiktische als den letzten grund. Aber um das zu erreichen, sollen wir von der konkreten Erfahrung oder dem Gegebene aus ausgehen. Er verlangte die Lebenswelt als den solchen Ausgangspunkt. Das ist das erste Motiv der Einfuhrung jenes Begriffs. Dann wir finden den Begriff "Lebenswelt" als den thematisierten Begriff in der "Krisis". Das hauptsachliche Interesse von Husserl lag damals an der Geschichte. Nach der geschichtlichen Betrachtung, dachte er, dass die Menschheit gegen dem Objektivismus von Galilei das Konkrete und das Echte erreichen soll. Als das solche fand er die Lebenswelt. Die Lebenswelt ist hier nicht nur der Ausgangspunkt, sondern auch der endepunkt. Das ist das zweite Motiv. Mit einem Worte, ist das Motiv dafur die Forderung "zur Sachen selbst". (unvollendet)
Notes	横山松三郎先生古稀記念論文集
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000038-0118

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

「生命界」概念を中心とする
フッサール後期思想の展開（続き）

山本万二郎

本論

一　「生命界」概念の始まり

フッサールの既刊著作の中、主題化されたものとして最初にこの概念に出会うのは、一九三六年「哲学」誌上に於ける「危機」の第二部に於いてであり、次いで一九四八年「経験と判断」に於いて、更に一九五四年公刊された「危機」の第三部に於いてである。

しかし「第一哲学」第一部の編者ボェームの指摘するように、同書附録の論文にて一九二四年フライブルヒに於けるカント記念講演の中に於いて、いまだ主題化されているわけではないが、現実的生命界という用語が表われている。(註1)更に最近出版された「第一哲学」の第二部に於いても、その附録の論文に於いて、その題名「イデーンのデカルト的な途と眼前に与えられた生命界の問題」(Der cartesianische Weg der „Ideen" und das Problem der vorgegebenen Lebenswelt) の中及び本文の中に用いられ、本文に於いては人間的生命界ともいわれている。(註2)同論文の年代については、同書の目次には、一九二五年と記されているが、本文の註に於いて、フッサールは一九三〇年頃と推

定しているけれども、恐らくそれ以前但し一九二四年以後であろうと編者が述べている。[註3] 従つて用語としては一九二四年のカント記念論文が最初であろう。「第一哲学」第二部の本文に於いては、私の生命と私の体験界という用語及び経験界という用語を見出す。[註4] 同本文は一九二三―一九二四年のものであるが、更に一九二三年の附録論文の中に於いて、「所与の世界」(Gegebene Welt) という用語を見出す。[註5] これらの用語はいずれも「生命界」に通ずる先駆的なものであるが、これについてフッサールは、同書の編者ボェームも指摘するように、そのような思想即ち非デカルト的な途についての考えは一九一〇年まで遡ることが出来ると解している。[註6]

次に未刊原稿について見ると、最初に出会うのは一九二〇―一九二六年と記されている原稿に於いてである。[註7] そこに於いて「普遍的生命界の成層」(Abschichtung der allgemeinen Lebenswelt) という用語を見るのであるが、それが一九二〇年に近いのか又は一九二六年に近いのか不明確である。一九二五年の原稿に経験界という用語があつて、[註8] その原稿の編者はそれが生命界なる概念の芽生えであろうと記している。[註9] 確かに一九二七年の原稿に於いて、我々の生命の経験の世界としての具体的生命界という用語を見出すのである。[註10] 而して一九二六年の他の原稿の中には生命界という用語は見出されないが、後に生命界の同意語となるべき概念を見出すことが出来る。[註11] 更に一九二六―一九二七年の原稿の中には別の同意語を見出すと共に、[註12] 一方明確に生命界なる概念を見出す原稿もある。[註13] 而して一九二七年の原稿に於いては明らかに用語としての「生命界」なる書き方をしている。[註14] 従つて生命界なる概念はその頃から用語として用いられるようになつたと見ることが出来よう。而して生命界が標題となつている原稿は一九三〇年頃から見出されるのである。[註15] それ故前述の「第一哲学」第二部の附録論文も、フッサールの推定年代の方が却つて正確に近いかも知れないのである。

尚前記一九二四年の論文がカントに関するものであるばかりでなく、前記一九二五年及び一九二〇―一九二六年の二論文（原稿）も先験的感性論という題名を有し、何れもカントに関するものであるのは注目すべきことであろう。

註

1 Husserliana, Bd. VII, 1956, XXXIII, S. 232

2 Husserliana, Bd. VIII, 1959, S. 272

3 a. a. O. S. 257

4 a. a. O. S. 158, 151

5 a. a. O. S. 225

6 a. a. O. S. 225, XXXV XXXVI 一九一〇―一九一一年のゲッチンゲン講義まで遡れることを意味する。

7 Mss. A―VII―14, 1920-1926, S. 24.

8 Mss. A―VII―26, 1925, S. 24, 26,

9 編者ディエム女史（Fräulein Dr. Diem）「ここに新らたに附加された事は、フッサールによつて後に生命界となる経験界についての注意である。経験界をその普遍的構造について開示しようとする要求が、フッサールにとつて益々はげしくなつている。」（A―VII-26, X）

10 Mss. A―VII-19, 1927, S. 21.

11 Mss. B―I―7―I, 1926, S. 2「前学問的生命」（das vorwissenschaftliche Leben）という用語がある。Mss. B―I―12―II, 1926 S. 63.「経験界」（Erfahrungswelt）、「相互主観的環境」（eine intersubjektive Umwelt）という用語がある。

12 Mss. B―I―12―III, 1926―1927, S. 20, 21, 23.「経験する生命の世界」（die Welt des erfahrenden Lebens）、「眼前に与えられた世界」（die vorgegebene Welt）、「前学問的生命の世界」（die Welt vorwissenschaftliches Lebens）という用語がある。

13 Mss. F―I―33, 1926―1927, S. 205, 207.「具体的生命界」（die konkrete Lebenswelt）という用語がある。

14 Mss. A―VII―19, 1927, S. 21. "Lebenswelt"

15　例えば次の様な標題を有する原稿がある。

A—V—14, 1933, Lebenswelt als Umwelt einer Menschheit; Lebenswelt als historische Welt.

A—V—15, 1930—1932, Lebenswelt, die immerfort der Wissenschaft und der in ihr wissenschaftlich gefassten Welt vorangeht.

A—V—16, 1930—1932, Die Lebenswelt und die unendliche Welt der Wissenschaft.

二　生命界概念導入の動機

この問題は二つの方面から明らかにされ得るであろう。即ちその一つは、生命界なる用語の初めて使用されるに至つた動機からであり、もう一つは、晩年に於いて主題化された当時の動機からである。前者は一九二四年から一九二六年頃といえば、丁度「第一哲学」（一九二三—一九二四）の成立した当時であるから、その成立当時の考え方を見ることにより、又後者は結局「危機」（一九三六）の成立当時の考え方を見ることによつて明らかにされ得るであろうと思う。

a　前者については先にも一寸触れたが、更に同書の編者の言に耳を傾けよう。その当時はドイツの各大学の教授がそうであるように、フッサールは自分の学説と研究の統一を志した。勿論そこに企てたものは、更に新らしい問題乃至思索への出発点乃至途であるに過ぎなかつた。それは厳密さを求めるものであつて、第一哲学とは先験的認識論であり、あらゆる形而上学に先立ち而してその可能性の制約となるものである。この点に於いてカントを指示するものである。第一哲学という名称も、アリストテレスやデカルトと関係あるのは勿論であるが、特にナトルプのフッサールのプロレゴメナ批判に負う所が多い。寧ろその批判の中にナトルプが第一哲学という名称を用いている。第一哲

学としての現象学は先験的還元の原理の発見と関係がある。従ってそれは一九〇七年の「現象学試論」と関わるのである。又他方フッサールは初め「考案」の第三巻として第一哲学を企てたのが、後に変更された事は前述の通りである。但し初めの計画は一九二二年迄は持っていたのであるが、一九二三―一九二四年の第一哲学を含む二つの講義の準備のために変更したのである。その講義について彼は一九二四年一二月のインガルデン宛の手紙に於いて次の様にいっている。私は非常に深い非常に難しい講義を行なった。それは二つの相互補充的な関係にある基礎的講義であって、その一つは「第一哲学」であり、それは現象学的還元の意味と効力範囲とについての最も根本的な現象学的基礎づけである、もう一つはあらゆる客観的認識批判の最後の根拠としての先験的現象学的認識の批判の企てである。私はそれによって現象学的哲学を新らしい層にまで高めたと信ずる。……その企ては最も普遍的な最も徹底的な見地に於ける「第一哲学の冥想録」(meditationes de prima philosophia)の企てであると。而して一九二三年八月三十一日の同氏宛の手紙によると、その講義は一九二二年のロンドン講義「現象学的方法と現象学的哲学」(Phänomenologische Methode und phänomenologische Philosophie)を拡大深化したものであり、一九三〇年三月十五日のヒックス宛の手紙によると、更に一九二九年のパリ講演もロンドン講義を基礎とするものであると。従って「デカルト的冥想録」もそれと同じ思想線上にある。いいかえれば「第一哲学」の予想した完成した型が「デカルト的冥想録」であるといえようというのである。(註1)

以上は編者の解説であるが、編者がその中で最初に引用したインガルデン宛の手紙のうち途中彼が省いた部分を補うと、そこでフッサールは次のように言っている。「相互主観性への現象学的還元に対する導きと拡大」とを齎らした所の、一九〇九―一九一〇年の古いゲッチンゲン講義の思想も、(現象学は外見上のみ独我論的である、完全な先

験的還元は自我を越えて自我と共同している開放的な全自我を生ずるという思想)、今や(第一哲学を含む二つの講義に於いて――筆者記)新らしく完成して講義された[註2]」と。更に一九二五年十二月十日の同氏宛の手紙に於て次のように言つている。「勿論理性の理論としての認識論は、全く先験的哲学の中に属する。しかし先験哲学が「考案」に於いて取扱われた限り、先験哲学は「高次」の素朴性の一つの層にある。何故かというと「我思う」の明証と自我論的に純粋な可能性の地盤の明証は、批判を必要とする素朴的明証であるからである。それ故単純な現象学的還元と「コペルニクス的」還元乃至必当然的なるものへの還元とを私は区別した。この必当然的なるものが現象学的還元に於いてのみ行なわれるべき所の、従つて現象学の前には考えられなかつたであろう所の、根本的認識批判としての真正な認識論の領域である。かゝる詳論への最初の体系的試みが、私の四時間の冬の講義(一九二二―一九二三)の全内容を形成する」と。[註3]

要するに「第一哲学」に於いて求めようとするものは、認識批判の根源的地盤であり、それに達するために「試論」や「考案」の素朴性を相互主観性と必当然性との二つの方向に於いて越えようとするものであろう。それでは先づ必当然性とは、その当時どのようなものと考えられていたであろうか。フッサールは先験的主観性への還元としての先験的還元と、同様に先験的主観性への還元ではあるが、確立された必当然性への制限の下に於ける還元としての必当然的還元を区別した後[註4]、「しかし我々は記憶の具体的内容に関し、本来の完全性の下に於ける過去志向的近接領域の記憶に対してのみ、即ち重畳や融合に対する確実性に対してのみ、必当然的明証を持つ[註5]」とし、更に「換言すれば若し我々が必当然的確実性の内容として実在的対象の単純な存在ではなく、一致的に基礎づけられた予見の推測的確実性に於ける存在を有するならば、再び必当然性を得る。同時に次のことが明らかである、即ち我々の考察による実在界

の現象学的括弧入れは、新らしい意味を確保したということである、即ち固より日常の経験の世界が必当然的確実性ではなく、かゝる世界は必当然性にまで決して来ることは出来ないという事、而してそれに反してこれまでの経験の一致性によつてよく基礎づけられた経験の確実性としての世界の経験的確実性は、その一致性が続く限り、いつも必当然的に是認されるべきものである——正に一つの様相として是認されるべきものであるということである」(註6)と解している。而してこの一致性が、単に自我論的に留まらず、相互主観的にまで進展する所に、必当然性と相互主観性との結びつきが成立するのである。

今「第一哲学」第二部を見るに、その重点は正に必当然性と相互主観性の二つにかゝつていると思われる。即ちそこに於て必当然性が四通りに解されている。①自然的経験に対し、絶対的なものとしての先験的又は現象学的経験(註7)、②十全ならざる経験に対し、十全な明証的経験(註8)、③単に先験的又は現象学的に還元されたものに対し、更に自己反省による是正が行なわれ、一致的なるものとして見出されるもの、即ち必当然的還元の行なわれたもの(註9)、④自我論的経験に対し相互主観的還元を経たるもの(註10)。それ〴〵後者が必当然的なるものと解されている。しかしその中本来のもの或は中心的なるものは第三のものであつて、それが先験性に於ける素朴性を越えるものとしての自己批判による究極的厳密性を得ようとするものである。それを必当然的批判と呼んでいる(註11)。かゝる批判にたえるものこそが、あらゆる認識批判の根拠としての第一哲学の名にふさわしいと考えたのである。而して一致性の赴く所、当然自我論を越えて相互主観的一致性を追求しなければならぬ。それ故相互主観性は必当然性の究極形態として求められるのである。その意味に於いて「第一哲学」の二つの重点は必当然性の一つにしぼられることが出来よう。

尚相互主観性の思想は右の様な要求の下に同書に於いて最後の部分に叙述されているが、それは「冥想録」に於い

て大きな展開をするものとして、そこではまだ暗示的に留まる。しかし暗示的にせよそれがそこで説かれている事は、それが後期思想の特徴の一つであるだけ、それだけ重要な意味を持つている。而して生命界の意味の規定にも、その事が大きな役割を持つていることを指摘しておかねばならぬ。

以上は「第一哲学」を求めようとする動機である。それではその動機が何故生命界概念導入の動機と結びつくのであろうか。フッサールは「第一哲学」に於いて次のように解している。先づこの世的経験（die mundane Erfahrung）から還元して先験的経験の世界を求め、更に還元して必当然的なものを求めようとするに当つて、第一次的に求められる自我が空虚なものであつてはならない。元来括弧入れとは、入れられるものが視界から消え去るのではなく、唯見方を異にしてあるだけのものである。しかし突恕として先験的主観性を求めると、その点が見逃されるおそれがある。それ故「考案」に於けるように「自我から」ではなく、今や新らしい途としての「世界から」の順序をとらねばならぬ。即ち具体的な経験の世界から一歩々々次第に真の純粋主観性としての ego cogito に進もうとするのである（註12）と。ここに「第一哲学」がとろうとする新らしい途としての第二途なるものが示されるのである。この第二途と関聯して体験界経験界更に生命界への連らなりが見出される。即ち生命界概念の導入の動機は、必当然的なるものを求めるに当つて具体的なるものから出発しようとする要求に基づくものといえよう。それでは生命界概念の最初に導入されたカントの記念論文とこの事とはどのような関係にあるであろうか。

カントについての関心は拙論（註13）に於いて見られるように、フッサールの全時期を通じて見られる所であるが、先づ空間について深い関心を有している。空間は一方カントのいうように人間的制約を受けるものではなく、無制約的のものであると同時に、他方カントのように直ちに普遍的のものとして表われるのではなくて、個別的のものから次第に

相互主観的に成立するものである。フッサールのカント解釈に於いて前期は主として前者を指摘し、後期一九二四年の論文に到つて後者を指摘している。生命界概念の最初に用いられたカントの記念論文「カントと先験哲学の理念」(Kant und die Idee der Transzendental-philosophie) は一九二四年五月であるが、同年二月同様にカントについての論文「カントのコペルニクス的転回とかゝるコペルニクス的転回一般の意味」(Kants kopernikanische Umdrehung und der Sinn einer solchen kopernikanischen Wendung überhaupt) の中に於いて、普遍的空間と個別的空間とを区別し、後者は個人的身体を基準として構成されるものであること、(註14) この事は知覚又は知覚的対象についても同様であること、(註15) 而してそれから交渉的相互主観的に同一対象に到達すること、(註16) を述べている。これが先験的感性論の限界をなすのであるが、(註17) カントがこの点について不注意であることを指摘するのである。かゝる見地から次の記念論文に於いてカント哲学を現象学的見地から解釈して、現象学の最初の段階は、あらゆる現象乃至所与を直観的に記述するものであるとなし、(註18) それが先験的感性論の部門であるが、それは世界の与えられ方を考察するものである。そこで「現実的生命界が体験所与性の様相の下に考察されるや否や、世界は無限の広さを獲得する」というのである。(註19) 而して先験的見方というのは決して自然的見方を捨てることではなく、(註20) 寧ろそこに帰えつてその意味を明らかにし、(註21) そこに前提された自明性を明らかにしようとするものなのである。(註22)

かくて一九二五年の先験的感性論の題名を有する原稿に於いて次の様に述べている。「経験を記述せよ——我々の共同の下に於ける我々の経験界を記述せよ、而して相互主観的に一致的な経験と一致的に経験され得るものへの見方に於いて、必然的にそこにあるものを記述せよ。経験界をその普遍的な構造に従つて開示する。経験界の真の存在を経験界の普遍的構造形態に従つて開示する、その普遍的構造形態は、我々の共通な——一致的に確認され又確認されるべ

き――経験の世界として、経験界に属するのである」と。(註23)

かゝる見方から同年代の原稿の中に「信念動機の分析」(註24)とか、「我々は自然人を彼等の言語と思惟悟性で考察するのでなく、私の学問で考察する」(註25)ということを見出すことが出来るのである。

而して一九二七年六月二十八日のビューレル宛の手紙に於いて、「生命の経験界がそこに於いて具体的に与えられる所の、具体的にして生き〳〵せる経験。その相関に於いて存するものを体系的にその本質必然性に於いて表現するのが、先天的にして先験的な現象学の根本的意味である、……恐らく今や心理学者にとつて、これまでの全部の問題と能作とを反省的に一度押し戻し、而して全くあらゆる理論的労作以前にあるもの、即ち生命の経験界がそこに於いて具体的に生き〳〵と与えられる所の普遍的な前学問的経験を再び熟慮する時である」と言つている。(註26)

この空間概念の批判に始まるカント批判に関する所説は、普遍化の方向というよりも寧ろ個別的具体的なるものとしての経験に地盤を求めようとする方向を示すものである。そこに生命界概念が導入されたのである。それ故カント批判に於いても生命界概念導入の動機は、「第一哲学」の場合と同様に具体的なるものへの要求であるということが出来よう。

それではその当時第一哲学を求めようとした動機である必当然性への要求と、この具体的なるものへの要求とは、どのような内面的かゝわりを持つのであろうか。即ち具体的なるものとして求められる生命界は、必当然性を求めようとして、そこから出発すべき途として見出されたのであるが、一見相反する様に見えるこの二つの動機は、どのような連らなりを本来持つのであろうか。

この点については、前に引用した手紙に先立つ一九二三年八月十一日のインガルデン宛の手紙の一部に次の様な注

目すべきものがある。「我々は新らしい生活に、差し当り学問的生活の新らしい仕方にまで元気を持たねばならぬ。「母への歩み」(Gang zur den Müttern)は、あらゆる点に於いて根源的明瞭さによつて、自己の権利、自己の意味、自己の正しさを理解し又究極まで理解することの出来る所の、「根源的」生命への戻り且つ進む歩みである。人間は自分自らをのみ救うことが出来る。人間は唯我々が各自己によつて又自分だけで自己救済を行なう場合にのみそれをなし得る。即ち我々が各々我々のあらゆる意図を自己解明自己認識自己純化に向け、而してそこから普遍的に結合せる真の人類超国民的人間性の理念……純粋性正当性を明瞭にしつつ準備しようとする勇気と偉大な意志を見出す場合にのみ、そうすることが出来る」(註27)と。ここに二つの重要な要素を見出すことが出来る。即ちそれは根源的生命と人間性である。そこで若し必当然性への戻りが同時に根源的生命への戻りであり、而してそれが生命界と関わりを持つとすれば、ここに二つの動機即ち具体性と必当然性或は生命界と根源性との関係が明らかになるであろう。この事は項を改めて論及しなくてはならぬ。更に人間性に関しては「危機」に連らなる思想であることを指摘したい。そこで今や第二の時期、即ち「危機」及び「経験と判断」に於ける生命界概念導入の動機の考察に移ろう。

註 1 Husserliana, Bd. VII Einleitung des Herausgebers, XII—XXIV.
尚「第一哲学」とロンドン講義との関係については Mss. R. Brief v. Husserl an Ingarden; 14/12/1922 に於て「私は第一哲学 (prima philosophia) の根本的な全く原理的な冥想としてのロンドン講義を完成した」といつている。

2 Brief v. Husserl an Ingarden, 12/1924

3 Brief v. Husserl an Ingarden, 10/12/1925 この手紙の中にある一九二二—一九二三年の講義は、「第一哲学」の講義(一九二三—一九二四)の前年度に行なわれた「哲学入門」(Einleitung in die Philosophie)の講義であるが、これが引続いて行なわれた二つの講義であつて、前者の思想は内容的にも「第一哲学」で引継がれ深められている。(Vgl. Husserliana, Bd. VIII, S. 80)

4 M—I—2—I, 1922—1923, s. 55
5 a. a. O. S. 124—125
6 a. a. O. S. 249
7 Husserliana, Bd. VIII, S. 31—31
8 a. a. O. S. 35
9 a. a. O. S. 80, 173
10 a. a. O. S. 173, 177
11 a. a. O. S. 171
12 a. a. O. S. 76, 111, 126
13 「九五八年「哲学」第三十五輯、拙論「フッサールのカント観」
14 Husserliana, Bd. VII, S. 212,—213
15 a. a. O. S. 214—215
16 a. a. O. S. 216—217
17 この点については、Husserliana, Bd. I, S. 177, Erfahrung und Urteil, S. 67, に於いても同様である。
18 Hussrliana, Bd. VII, S. 231
19 a. a. O. S. 232
20 a. a. O. S. 270
21 a. a. O. S. 258
22 a. a. O. S. 245
23 A—VII—26, 1925, S. 26
24 B—I—27, 1924—1926, S. 8
25 B—I—28, 1923—1924,
26 Brief v. H. an Bühler, 28/6/1927

27 Brief v. H an Ingarden, 31/8/1923

b 前述のように「危機」の問題は十年も前から考えられていたとすれば、一九二四年から一九二六年頃にかけて考えられた事は、同時に「危機」の動機であるとも解されるが、十年の経過の中にはそれだけの円熟さが見られるであろう。そこで先づ「危機」に於いてどの様にして生命界概念が導入されて来たかを見よう。

前述の様に「危機」の原稿成立に先立つて一九三五年ウィーンとプラーグで講演している。而してそれが「危機」の母胎をなすならば、一九三五年前後に於ける彼の最大の関心事は歴史の問題であつたことが、その当時の手紙によつて明らかである。(註1)

かくて「危機」は先づ歴史的考察から始まるのである。この歴史的考察ということも、纏まつたものとしては、一九二四年の「第一哲学」第一部とこの「危機」の第二部位のものであつて、その両者が何れも生命界概念に繋りを持つのも両者に於ける動機の内面的な連らなりを思わせる。又後に示すように歴史的考察ということが、フッサールの後期思想の特徴の一つであることを以てしても、両者の連らなりが考えられる。

フッサールによれば、ルネサンスは以前の中世的存在仕方に反して、新らしい自由な形成への転向であるが、その模範を古代人にとつたのである。古代人の本質とは哲学的な存在仕方であり、それは純粋理性に基づき即ち哲学に基づいて自己によつて自己の全生命に自由に規則を与えることである。従つて理論哲学が第一であつて、実践的自律性も理論的自律性に従うのである。(註2)従つてかゝる理性への信仰の喪失、即ち世界も亦その根拠的意味をそこに有する所のかゝる絶対的理性への信仰の喪失が現代の危機である。(註3)而してかゝる理性への信仰の喪失は、一方普遍哲学への信仰の喪失であると同時に、人間存在に自由を創り出そうとする歴史的意味への信仰の喪失でもある。(註4)というのは哲学

の歴史は人間存在のための争いの性格を持つているからである。(註5) いいかえれば哲学とは、人類にとつて生来である所の普遍的理性の開示の歴史的運動であるからである。(註6)

それでは現代に於けるかゝる危機はどこから起こつたのであろうか。それは真の存在を求めようとする要求が、ガリレイに於いて数学的科学的に追究されることによつて、現実が抽象化され理想化され、かゝる本来主観的に構成された抽象的理想的形象が、現実に対し真に実在する世界として認められるに至つたこと、即ち客観主義的傾向に基づくのである。ガリレイにとつてはかゝる数学的自然認識の理念というものは自明のものであつた。しかし我々はその意味を明らかにしなくてはならぬ。(註7) そこで先づ数学的及び科学的抽象の行なわれる以前の地盤に戻らねばならぬ。それはいまだ相互主観的普遍化的手続による以前の、前学問的主観的環境であり、(註8) それは純粋な思惟手続によるものではなくして、経験的測量術やその経験的実践的な客観化的機能に基づくものである。(註9) これに対し前者は正確性を理想として量化によつて次第に近似性を求めようとするものである。(註10)

かくて真実を求めようとする要求の下に、抽象的理想化を真の存在として自明的に信ずる立場を批判して、それの基づく具体的地盤として先づ環境が求められた。それがやがて唯一の現実的世界、現実的に知覚されて与えられる世界、それ〴〵に於いて経験されたる又経験され得べき世界としての我々の日常的生命界として規定されるのである。(註11) かくて生命界は、そこに於て我々の一切の生活の行なわれる所であり、そこに於て幾何学的数学化や自然科学的数学化が行なわれて理念の衣を着せられる所として見出されるのである。(註12)

そこでこのような生命界及びその主観としての人間についてよく考察しなくてはならぬ。(註13) しかしこのようなあらゆる現実的生活と学問的思惟生命をもその中に含み而して技巧的意味形象の源泉となる所の、かゝる前学問的又は外学

問的な生命界を根抵的直観に齎らすことは難かしい。即ち素朴的な生活上の言語の用法を選び、しかも明証的に適当に使用することは困難なことである。けれども生命の素朴性に正しく帰えること、しかもそれを越える反省に於いて戻ることが、伝統的な客観主義的哲学の中にある哲学的素朴性を克服するための唯一の可能な途であることが次第に而して終りには完全に明らかになるだろう。而して既に繰り返えし暗示した新らしい次元に対して扉を開くことであろうといつている。(註14)

かくて歴史を通して求めようとしたものは、真実性と具体性であるといつていいであろう。この二つに動機づけられて歴史を見る時、批判的理念史が成立し、その終極に於いて生命界が求められて来たと見るとこが出来よう。

さて「危機」に於て生命界を主題化した動機は、これで一応見出されたのであるが、しかしこれを以てその動機の意味はいまだ究極までつきつめられていない。というのは、「危機」に於いては真実性と具体性とを求めるために生命界が導入主題化されたのであるが、その具体性については前述によつて一応その意味は明らかであるにしても、真実性についてはその意味が明らかでない。最後の引用文がそれを暗示しているのであるが、この点についてもう少し究明しなくてはならぬ。「危機」に於いては具体性と真実性とを求めようとして、客観化に対して主観化を目指す方向がとられているのであるが、その方向にとつては、生命界はたとい科学的客観化を免れるとしても、それが前科学的経験的である限り、まだ不充分である。というのはそれもまだやはり客観化的機能に基づいているからである。いいかえればまだ素朴性を脱していないのである。そこで今やかゝる生命界に対してもデカルト的判断中止を未曾有の厳密な根本的性格を以て行なわねばならぬ。というのはその判断中止は、必当然的明証を要求する数学をも含む一切のこれまでの科学の妥当性のみならず、前学問的又は外学問的な生命界、即ち感性的経験とそれに基づく思惟生命——科学

的思惟をも含む非科学的思惟生命――の不問の自明性の中に前以て与えられる世界の妥当性をさへ含むからである。(註15)かゝる判断中止に於いてデカルトの cogito に到達するのである。即ち先験主義の立場からいえば、眼前に与えられる生命界の存在意味は、主観的形象に外ならないのである。即ち経験する生命或は前科学的生命の能作である。(註16)ここに客観主義的哲学と先験哲学との緊張が生ずるのである。(註17)勿論現象学は後者の立場に立つものである。しかしデカルトは cogito を折角発見し乍ら、そこまで到達しなかつた。即ちデカルトは一方自我を以て実体とし、他方推論の公理と考えた。(註18)これはまだ客観主義を脱しない所である。そこでかゝる客観主義的性格を脱するように努力したのがロック、バークレー、ヒュームである。しかし彼等も経験的心理学的に自我を考察する限り、先験性に到達出来なかつた。(註19)かゝる欠点を脱して先験性に到達したのがカントである。しかしカントは折角デカルトに淵源を有し乍ら、ロック、ヒュームの途をとらず、ライプニッツ、ヴォルフの途をとつたために、合理主義的前提を完全に脱することが出来なかつた。(註20)即ちカントは、たとい合理主義者と異なつて理性批判を行なつたとはいえ、やはり彼等と同様に科学の真理性を前提した。(註21)カントはそれを地盤として、それが如何にして可能なりやという可能性の制約の問題に途をとつたのである。しかし寧ろ飜つてかゝる地盤それ自身の成立する根拠を究明しなくてはならなかつた筈である。その根拠が生命界であつてそれが不問のまゝになつていた。かくてカントの問題提出の中には、我々がそこに於いて哲学や科学や文化生活をする所の、日常的な生活環境が前提されていた。(註22)而して一方カントは悟性の二重の作用を発見し乍ら明確にしなかつた。即ち一つは明瞭な反省に於いて規範的法則の中に自らを顕わす悟性であり、他は隠れて作用する悟性であつて、それは絶えず生成する直観的環境に対する構成的悟性である。(註23)而して後者はやがて先験的主観性に結びつくのである。

かくて生命界の概念は、デカルトに機因を有し乍らカントと結びついて一層深められる。というのは生命界と先験性乃至先験的主観性との結びつきが問題となるからである。かくて生命界が単なる日常的生命界に留まらず、先験的なるものとの関わりの下に於ける生命界が考慮されることになろう。ここに於いて生命界と真実性との結びつきが見出され、かくて先に述べた生命界を求める二つの一見相反するように見える動機が結びつくのである。

即ち「危機」に於て生命界導入の動機は、一方に於いて、「第一哲学」当時カント論文に見える様に、カントが一般的な空間概念を無批判的に導入しようとするのに反対し、具体的経験の地盤に拠るべきものとして生命界を導入したように、ここでもガリレイの抽象的形象を自体存在とする誤謬を正すべく、それらの却えつて拠つて立つ具体的根拠として生命界を導入したのであると共に、他方先に必当然性なる根源性への要求に関わりを持つていたように、ここではカントの先験性と結びついて、根源性への要求を持つている。要するにその導入の動機は、前の場合と同様に具体性と根源性とにあると言つていいであろうが、前の場合にはその二つがいわば単に目的と手段のように外面的な関係に過ぎなかつたのに対し、ここに於いては、その二つの動機が内面的に結びついたということが出来よう。即ち真の具体性は直ちに根源性に通ずるのである。前には単なる出発点として求められた生命界が、今や単なる出発点につきることなく、それは同時に究極点でもあるのである。

哲学とは人間性の真実を究極的に求めようとする歴史的展開である所から(註24)哲学史的に見て生命界に関し、近世初期はガリレイと結合して第一段階の、更にデカルト、カントと結びついて第二段階の開明が行なわれようとするのである。而してその展開が同時に根源性に連らなるのであろう。

註1　Brief v. H. an Ingarden, 26/11/1934, 10/7/1935, 2/1936 何れも序論二aの註に示したもの。

2 Husserliana, Bd. VI, S. 5—6
3 a. a. O. S. 11
4 a. a. O. S. 10—11
5 a. a. O. S. 11
6 a. a. O. S. 13
7 a. a. O. S. 21
8 a. a. O. S. 24
9 a. a. O. S. 25
10 a. a. O. S. 32—33, 36, 39.
但し後者にも量化が全然ないのではない。経験的量化が行なわれている。(a. a. O. S. 25) この事は「経験と判断」第一章に於いても同様である。
11 a. a. O. S. 49
12 a. a. O. S. 51
13 a. a. O. S. 54
14 a. a. O. S. 59—60
15 a. a. O. S. 77
16 a. a. O. S. 70
17 a. a. O. S. 71
18 a. a. O. S. 80
19 §23, §24, §25
20 a. a. O. S. 94, 100
21 a. a. O. S. 105
22 a. a. O. S. 106

23 a. a. O. S. 107
24 a. a. O. S. 11, 15

要するに生命界概念の導入は、一方に於いて具体性を求めようとし、他方に於いて必当然性又は真実性としての根源性を求めようとする要求に動機づけられているといえよう。一言にすれば、現象学本来の標語である「事実そのものへ」の要求に基づくものである。而して生命界概念の、最初の導入も晩年の導入も、その何れの場合にも歴史を背景として、たとい批判的にであろうともカントと関わりを持つていることは、再び注目すべきことであろう。

かくて今や生命界概念の種々な階層的意味を次第に明らかにして行かなくてはならぬ。

（未完）

○本稿は「哲学」第三十七集の前稿と共に、一九五九年度前期慶応義塾学術振興奨学研究費補助による研究の一部である。